

工学部・工学研究科

I	研究水準	研究 9-2
II	質の向上度	研究 9-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況について、平成 18 年度の教員による学会発表件数は 1,706 件、受賞数は 135 件、論文数は 2,036 件、著書数は 136 件である。文部科学省科学技術振興調整費戦略的研究拠点育成プログラムにより設置したフロンティア研究センターを活用した、特許の出願件数は 171 件、産業財産権の保有件数は 78 件であり、共同研究講座は 9 講座に達している。研究資金の獲得状況について、獲得外部資金も高い水準にあり、専攻の枠を超え、世界トップレベルの研究拠点形成を目指し、16 件の専攻横断的研究組織が活動していることは、優れた成果である。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では次世代エレクトロニクス・情報通信の分野で、世界初の間人酷似型ロボットであるアンドロイドや遠隔操作型アンドロイドを開発しアンドロイドサイエンスを確立し、ナノサイエンス・ナノテクノロジー分野では、新しい室温原子間力顕微鏡の開発、コヒーレントアンチストークスラマン散乱顕微鏡を提案するなど

文部科学大臣賞科学技術賞等を受賞している。また、エネルギー分野、構造・機能先進材料分野等で多くの賞を受賞している。社会、経済、文化面においても、先端生産技術、統合環境学、自然共生学、バイオテクノロジー分野等で、社会のニーズに則した実用性の高い研究が行われていることは、優れた成果である。

以上の点について、工学部・工学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工学部・工学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 3 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。